



Title	秋田・自転車・景観デザイン
Author(s)	山内, 貴博
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

秋田・自転車・景観デザイン

山内貴博／秋田公立美術大学

街の雰囲気の違いとは何か？ という疑問から研究を開始して、当初は生まれ育った街を比較、現在は東北地方を中心に自転車を利用して調査を行っている。本稿は、秋田市内と男鹿地域、盛岡地域で行った3つのフィールドワークの分析と考察を論じている。

1. 秋田市内のフィールドワーク

秋田駅から5kmほど南に美大は位置している。大学の横を雄物川が流れ、西側はすぐ日本海である。通勤途中にとっても気持ちの良い「太平川」という川がある。春は桜並木の美しい川面に小舟が浮かび、夜は真っ暗な道に提灯が灯り幻想空間になる。ところで、秋田駅周辺の第一印象は、街中に緑が少ない印象だった。そこで、上述の太平川沿いの緑を南北方向へ街路樹などの緑として引込むことを考えた。一方、秋田駅にアーケードが東西方向に伸びている。その先の竿燈大通りでは夏に竿燈祭りが開かれる。駅前からアーケードの先に、竿燈の灯りが見えたら素敵を目抜き道になると思われた。さらに西側は日本海の夕日が見える。故に東西方向の街路は目抜きの軸と考えられる。つまり東西方向の目抜きと南北方向の緑「メヌキとミドリ」という横糸・縦糸を織物のように編む景観づくりの提案である（図-1）。以上、きっかけは太平川の風景で「街を流れる川とそこに住む人の営み」が分析①として挙げられる。

2. 男鹿地域のフィールドワーク

市内から男鹿半島に向かうと寒風山と真山が見えてくる。寒風山が大きな印象だが、模型を作ると真山の方が高いことが分かる。調査の中からSTEP 1を紹介する（図-2）。

「水の信仰と人々の暮らし」と題して実施した。はじめに水源地へ行き、祠や社を建てて水を守る様子が伺えた。次にこの湧水を抛り所として、田畑を耕し定住する様子を見届けた。そして、集落のコミュニティーを維持する為に、お祭りを行う事が理解出来た。お祭りとは船越水道が舞台の「統人行事」である。一昼夜酔わせた人を須佐之男命として牛に乗せて水路に連れて行く。水路には船を浮かべ八岐大蛇が居て戦う内容である。七夕に行われており、織姫と彦星の物語もかけているようである。以上、分析②として「生命維持とコミュニティー維持のしくみ」が挙げられる。

3. 盛岡地域のフィールドワーク

様々な人から「盛岡の街はきれい」と伺っていたが、調査した当初は的を得なかった。確かに景観政策も行われており、盛岡城のあった高台を視点場として岩手山への眺望保全など整備している。ちょうど昨年は、台風が来た時にフィールドワークしたので、街中はダムを放水しており、川に近づかないように警告が点滅していた。その様子から「治水」を意識することができ、街中の調査だけでなくダムへ行くことにした。四十四田ダムは盛岡から自転車で行ける距離にあった。ところで地図を眺めると、北上川は石巻まで延々と流れていくのだが、その様子から「盛岡は水源に近い一番きれいな水を最初に享受できる街」ということに気が付いた。昔から用水など次の集落へ続く為に、水を大切に扱う文化があるのではないかと思われる。すなわち「水が豊かだから盛岡の街はきれい」と腑に落ちた。またダムでは水力発電をしてい

た(図-3)。その風景から改めてインフラと自然エネルギーに意識が向かった。クリーンエネルギーの志向も街がきれいになる要因と考えられる。以上、分析③として「需要と供給(治水や水力発電のインフラ)」が挙げられる。

4. 考察(エネルギー供給の水系ネットワーク)

分析①～③に共通して「水の存在と人の営為」が考えられる。1. 秋田市内の机上調査では、かつて北前船が秋田土崎湊に寄港しており、その歴史を現代に顕在化したいと思っている人達がいることを知った。その時、当時の海運ネットワークをただの歴史的遺産ではなく、未来に生きるネットワークとして何か強いコンセプトが必要だと感じた。一方で『日本史の謎は「地形」で解ける【環境・民族篇】』竹村公太郎著、PHP文庫、pp.406-413では、未来を乗り切るために必要な社会基盤インフラとソフトな社会制度について、ソフトとハードを提言している。その中で特に『究極のクリーンエネルギー「水素燃料」インフラと、それを支える「水力」インフラ』に着目した。竹村は既存のダムを嵩上げするだけで、新規に作らなくても水力はまかなえると述べている。日本は背骨のように脊梁山脈が通っており、そこを分水界として国土全体を川が流れている。この川に、竹村の述べるクリーンエネルギー製造の「水力」インフラを整備するとすれば「エネルギー供給の水系ネットワーク」が、先の海運ネットワークを強化するかたちで、新しいコンセプトがつけられると考えられる(図-4)。

まとめとして、本稿では3つのフィールドワークの分析からエネルギー供給の水系ネットワークについて考察することが出来た。この「エネルギー供給の水系ネットワーク」を仮説のモデルと設定して、検証していくことが今後の課題として挙げられる。

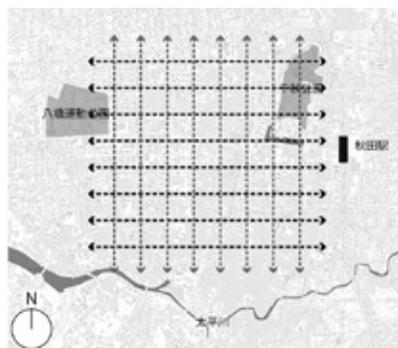


図-1 メヌキとミドリ

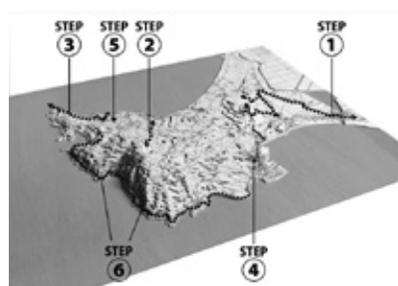


図-2 男鹿フィールドワーク



図-3 治水と水力発電



図-4 水系のネットワーク